

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：21301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884071

研究課題名(和文)オリエントの共謀：19世紀末に始まる人類学博覧会とその記憶

研究課題名(英文)Complicity of the Orient: Anthropological Expositions and their Memories from the late 19th Century

研究代表者

山本 まゆみ (Yamamoto, Mayumi)

宮城大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：60709400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化進化論をテーマに人間を「展示した」1889年パリ万博を観た人類学者坪井正五郎が、後日企画した1903年「学術人類館」から、彼の理論背景と当時の社会状況が、どのように展示に反映していたかの理解を目的とした。

成果として 坪井の理論背景が欧米の当時の先端理論に類似し、社会進化論的単一進化論ではなく、文化伝播論的観点から日本人種を見出していたことが判明した。学術人類館の「展示」の人間には、政治的にも人種的にも関わりの薄いジャワ人がいたが、ジャワ人は、植民地宗主国オランダ以外の博覧会へ頻りに展示されており、博覧会における「展示」される人を扱う産業に関する今後の調査課題が見いだされた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to explore the social and academic background of the 1903 Osaka "Academic Human Pavilion" which Tsuboi Shogoro designed after visiting 1889 Paris Exposition to show the theme of cultural evolution through exhibition of human beings.

The research achievements are twofold: 1) Exhibition documents and Tsuboi's writings demonstrate he did not follow the popular idea of single trait development of social evolutionism, but developed the idea of cultural diffusionism in order to understand Japanese race. 2) In the exhibition, Javanese people were displayed despite being neither close to Japanese racial traits nor close in terms of colonial politics. Javanese were displayed many exhibitions at that time, raising the question of a "human exhibition industry" in the Netherlands and her colonies, which will be the subject of further study.

研究分野：文化人類学

キーワード：歴史文化人類学 ポスト・コロニアル研究 オリエンタリズム 文化人類学史 比較学説史

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 万国博覧会に関連する国内外の研究の動向及び研究の位置づけ

エッフェル塔建立で脚光を浴びた 1889 年パリ万国博覧会は、「人間が近代生活の殿堂に至までの過程」という社会進化論の主題を掲げ、始めて「人間を展示」した博覧会であった。「人間展示」博覧会の研究は、帝国主義を反映した 19 世紀後半から 20 世紀前半に焦点をあて、帝国主義を鼓舞した権力の装置として解明した Robert Rydell の *All the World's a Fair* (1984) から本格化した。以来、数多くが類似した分析を繰り返しているが (Greenhalgh 1988、吉見 1992、Fermin 2004、Bloembergen 2006)、多くは、『オリエンタリズム』に依拠したものだった。展示された被植民地の人々を「他者」とし、博覧会を「他者へのまなざし」の場という分析 (松田 2003、Palermo 2003) や、精巧な模倣による疑似体験の場 (Mitchell 1988) といった被植民地を受動的な「他者」として語り、あたかも博覧会を作る側が進化論を内包したオリエンタリズム的社会表象を一方的に形成したかのような研究に終始していた。

### (2) 当初の研究成果を踏まえ着想に至った経緯

オリエンタリズムに依拠した作り手側の企図の研究が主流のなか、本報告者は見る側の理解に着目した。特に、本研究対象である 1889 年パリ万国博覧会は、国際人類学会が事前に開催されたこともあり社会進化論を主題とした博覧会には人類学者が多く訪れ、感想や報告書を多く残している。米国派遣団として訪れた人類学者 Mason Otis や Thomas Wilson は、その展示を「あらゆる段階の人間の居住を体系的に紹介している」と高く評価した。一方、当時欧州「留学」を開始したばかりの人類学者坪井正五郎は「展示は理論的に間違っている」と、自ら立ち上げた『東京人類学会雑誌』『パリー通信』の

中で「理論的に間違っている」と酷評した。

パリ万博に対する坪井正五郎と欧米人類学者の評価の違いを、社会進化論で西洋と異なる段階に位置した坪井=日本 文明の「まなざし」の違いに依拠していると考察し (このような考察はすでに松田が 2003 年に発表していたということを本研究中発見)、さらに本報告者は坪井と Otis の人類学教育背景が米国人類学者 Agassiz の流れを汲むことを解明。学問背景の類似性にも拘らず生じた評価の違いを、本報告者は、学問的というより日本と西洋という進化論的「進化の段階」に依拠する「まなざし」の違いとしてシンガポールで “Étrangers in Anthropological Expositions from Paris (1889) to Osaka (1903)” という招聘発表をした (2012)。このような、研究を続ける中、近代博覧会の理解が、現代の文化的価値観で、異時間にある社会、つまり「異なる文化」を解釈しているという、ある意味のエスノセントリズムに陥った「他文化」理解であり、19 世紀後半から 20 世紀前半の価値観とはかけ離れるものとなっていると再認識し本研究の着想に至ったのであった。

## 2. 研究の目的

### (1) 当初の目的

1889 年パリ万国博覧会は、「人間の展示」を初めておこない、20 世紀初頭に至る博覧会展示に大きな影響を与えた。この「人間の展示」は人類学学説の視覚的な具現化を企図したものであり、のちに展示を見た人類学者が関わった多くの博覧会に影響を与えた。

本研究は、パリ万博を直に観た人類学者坪井正五郎の大阪勧業博覧会に隣接したパビリオン学術人類館と Mason Otis が企画したシカゴ万博を中心に、史資料の悉皆調査分析で当時の社会状況を詳らかにし、博覧会の展示に秘めた植民地と被植民地の関係、現在の認識とは異なる被植民地内の人種、階級の確執、軋轢を解明することを目的としている。

さらに、昨今のオリエンタリズムに依拠した万博研究や旧植民地における万国博覧会の記憶を紐解き、オリエンタリズムに誘引された単純な二項率的歴史分析や、博覧会の記憶がナショナリズムと結びつくことで、歴史が単純化されナショナリズムと容易に結びつき、政治利用される危険性を孕んでいることを検証することを目的としていた。

## (2) 現在に通じる学術的な独創性と意義

研究当初、万国博研究或いは植民地研究はオリエンタリズムの影響を色濃く残し、被植民地は常に受動体として扱われてきていた。本研究は被植民地が決して受動的ではなく、むしろ被植民地内の民族や階級間の政治の影響力に着目していることで独創性があった。

約20年前、ポスト・コロニアル研究先駆者 Dirks が *Colonialism and Culture* でオリエンタリズム的分析の被植民地不在を問題視したが、本研究は万国博覧会の展示における被植民地の「共謀」を解き明かすことによって、オリエンタリズム再考への一助となると考えた。特に、被植民地を単一的な社会と捉える<sup>ア フリオリ</sup> *a priori*により、博覧会で展示された人々の経験が、あたかも被植民地全体の経験であったかのような語りに着目し、当時の被植民地社会の文脈から理解することで、単純化した記憶とオリエンタリズムの問題を総合的学問である歴史人類学を通じて貢献することができると思った。

## 3. 研究の方法

実質1年半という短い期間の本研究は、公文書及び史料の悉皆調査収集と分析が主となった。当初、長期海外調査を予定していたものの、本属の転職にともなう環境の変化もあり海外調査は短期になり、最も重要と考えていたパリ国立図書館の調査は、短時間で成果を挙げることの難しさを考え、変更せざるを得なかったが、想定外の成果が得られた。

研究調査は研究の目的に沿って、大きく4

点に集約し、体系的に悉皆調査が行われるように進めていった。Tylor の社会進化論・Morgan の文化進化論以降の英米および日本の人類学の潮流を理解する。坪井が企画した学術人類館と Otis が企画したシカゴ博の全貌を理解する。このさい、坪井や Otis の人類学背景を理解すべく、夫々の人類学論文および論考を精査する。大阪での内国勸業博覧会学術人類館に関する近年の研究の精査をする。19世紀後半から20世紀初頭の日本および米国の新聞および風刺画風の雑誌『東京パック』を通覧し、当時の社会を理解する。さらに、被植民地と博覧会に展示された人々に関する記述を検証する。に関しては、歴史的史料を中心に当時の人類学学会の空気と理論を理解すると同時に、植民地との関係に着目しながら当時の社会の状況を理解する。に関しては、現在の万国博覧会研究を精査し、今日のオリエンタリズムの影響を受けた研究が、植民地主義の記憶に対してどのように働か検証した。調査は、英国国立図書館(ロンドン)、英国国立公文書館(キューガーデン)、国会図書館、早稲田大学中央図書館で行った。また、調査の際、オランダ植民地のジャワ人に関して、何れの博覧会でも展示されていることを着目、オランダ国立熱帯博物館(アムステルダム)およびオランダ国立図書館(ハーグ)にて調査を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 進化論から相対論の移行期における人類学理論

本研究の問題提起の根本は、坪井正五郎のパリ万国博覧会に対する批判に端を発している。「パリー通信」には、「展示の論理が間違っている」ということではなく「論理が間違っている」とパリ博覧会を批判していることから、人類学の「後進国」であった日本に居ながら、坪井の人類学理論の斬新さは、英米第一線の人類学者に比類ないほどであっ

たことが伺えた。さらに、当時の人類学学説を精査すると、後の文化相対論の父 Franz Boas が既に進化論的博物館展示に批判(1887)、また坪井が「西洋から学ぶものはない」と豪語した記述からも、進化論的世界観の時代は既に終焉したと考え、当時の博覧会を進化論に裏打ちされ、西洋の優性の装置と成りえたという博覧会分析の限界が見出された。しかしながら、前述の理解はあくまでも学会レベルのことであり、一般市民に向けた博覧会に関しては、当時の文化・社会気運を知る必要があり、大宅壮一文庫のように時代ごとに多岐にわたる資料を通読することで、当時の状況を総合的に理解したうえで考察が必要であるとの結論に達した。

## (2) ジャワ人の展示と博覧会ビジネス

帝国主義の権力装置として機能していたとの研究が示すとおり、多くの植民地パビリオンの展示は植民地総督府の協力によって可能となった。有名なところでは、セントルイス万国博覧会では、米国民間人初代フィリピン総督であるウィリアム・タフトが積極的な協力をしたのは著名な話である。また、大阪勧業博覧会台湾館は、後藤新平総督の鳴り物入りで台湾高砂族がパビリオンに登場した。しかしながらジャワ人に関しては、1889年パリ万国博覧会、坪井正五郎の学術人類館のみならず、各地の博覧会で「人間の展示」として参加している。ここには、オランダ特有の博覧会ビジネスが垣間見られるのみならず、現在はしばしば人種問題や人権問題として語られる「人間の展示」に関して、世紀末の国境を越えたビジネスとして、人の移動とお金の移動という面のからの研究を推し進めていくことで、「展示された人々」の能動性を垣間見ることができるといふ仮説を見出した。

### <引用文献>

Boas, Franz. 1887. "Museums of Ethnology and Their Classification." *Science* 9

(229), June 24:587-89.

- Bloembergen, Marieke. 2006. *Colonial Spectacles: The Netherlands and the Dutch East Indies at the World Exhibitions, 1880-1931*. Singapore: Singapore University Press.
- Fermin, Jose D. 2004. *1904 World's Fair: The Filipino Experience*. Quezon: The University of the Philippines Press.
- Greenhalgh, Paul. 1988. *Ephemeral vistas: The expositions universelles, great exhibitions, and world's fairs, 1851-1939*. Manchester, UK: Manchester University Press.
- Mitchell, Timothy. 1988. *Colonizing Egypt*. Berkeley: University of California Press.
- Morgan, Lewis Henry. 1877. *Ancient Society*. Cambridge: MA, the Belknap Press.
- Palermo, Lynn E. 2006 [2003]. "Identity under Construction: Representing the Colonies at the Paris Exposition Universelle of 1889", in *The Color of Liberty: Histories of Race in France*, Sue Peabody and Tyler Stovall (eds.). Durham: Duke University Press.
- Rydell, Robert W. 1984. *All the World's a Fair*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 坪井正五郎著「パリ 通信」『東京人類学会雑誌』第43号、1889
- 松田京子著『帝国の視線：博覧会と異文化表象』東京：吉川弘文館 2003
- 吉見俊哉著『博覧会の政治学：まなざしの近代』中公新書 東京：中央公論社 1992
- 吉田光邦 編『図説万国博覧会史：1851-1942』京都：思文閣出版 1985

## 5. 主な発表論文等 〔その他〕

論文は、2012 年シンガポールの発表および本研究成果（1）を挿入したものを執筆中である。ただし、本属の宮城大学「日本の歴史・文化」および客員准教授を務める早稲田大学文学学術院の「人類学学説史」および「人類学最前線 歴史人類学」の授業を通じて、本研究の成果はすでに発表している。

## **6 . 研究組織**

### **(1)研究代表者**

山本 まゆみ (YAMAMOTO, Mayumi)

宮城大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：60709400